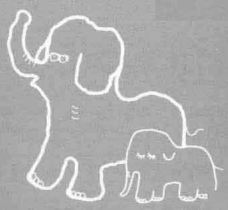
象使いの弟子 上

畑

ムッゴロウ世界漫遊記之内

象使いの弟子 上



畑 正憲

中央公論社

象使いの弟子 上

定価七八〇円

昭和五十五年四月二十日印刷
昭和五十五年四月二十五日発行

著者 畑 正憲

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話 (五六一) 五九二一
振替東京二-三四

©一九八〇
検印廃止

象使いの弟子＊上＊目次

第一章　ムツゴロウ夢の旅立ち　7
あちらこちらと迷った末に
イギリス製のヨージンボー
火のような熱いカレーを
第二章　はるかなり象の村　45
古きよき自動車の群れ
コロンボの優雅な日々
象のサーカス
第三章　象を待つ間の花いちもんめ　83
勇気ある四十歳の木登り
たわむれに椰子に登りて
ああダイナマイトどんどん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　象を求めて三千里　124
わが輩は世捨人
十三頭の仔象・中象
イグアナは野のチキン
第五章　長く熱い栄光のキス　162
象とキスと初体験と
これでようやく象まみれ
恐怖のどんがらピアノ
第六章　象学入門時代　197
今日は、ダルダメア
朝ご飯まだ？
殺人象で象のおけいこ

カバー写真／ジェルミ・エンジェル
挿画／木佐森隆平
カット／畑正憲

象使いの弟子　上

――ムツゴロウ世界漫遊記之内

第一章　ムツゴロウ夢の旅立ち

あちらこちらと迷った末に

たいてい男の胸の奥底には、妖しい美女が棲んでいる。もちろん糟糠の妻などというものではなく、ましてや会社の同じフロアで働く誰それさんなどにはまったく似ていない人が。

煙草が欲しいと思い、しかし寝返りをうって火をつけるのがおっくうな休日の午前中、しばしばその美女は姿を現わす。部屋にはカーテンごしに陽がさしこんでいて暑いのだが、私は布団にくるまって汗をかきつつ逢瀬を愉しむのである。

胸中の美女の姿形は、人によってたいそう違う。思い切って秘密を明かすなら、私のものは掌に乗るくらい小さく、とっても笑顔が美しい。ところが漫画家の園山俊二のものは、色白で、まるで象のように肥っているという。

「つまりは愛くるしいデブなんだなあ」
と、彼は目を細める。
どう考えたって、何時から棲みついているのか見当がつかない。男になっていく途中でふっと入ってきて、体の中の夢を喰いつつ形を成していくのだろう。
私の旅は、その美女そっくりだった。急に目の前に現われたり、春の淡雪みたいにまばたきをする間に消えてしまったりした。
五年前から私は言い続けた。
「そろそろ放浪の旅に出るぞ。その昔、水戸黄門だって漫遊の旅に出たではないか」
決して現状に満足していないわけではなかった。私は素直な動物たちに囲まれていて、ほぼ理想に近い生活を送っている。
しかし、である。だが——と言いたい。人には運というものがあって、この運の前に出ると、理想とか努力とか正義とかいう代物さえ顔色がなくなってしまう。
運にもいろいろあり、たとえば肛門運が悪いと痔になってしまう。宝くじを売っていたらビルの上から人が降ってきて、頭に命中して死んだ気の毒な方もいる。これは、宝くじで一千万円当たるより小さな確率であろうに。
運のうちで、人に最もうるさくつきまとうのは、持って生まれた性格であろうか。
こればっかりはどうしようもない。短気な人は、一生気が短い。修行によって多少は修正し得

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るけれども、怒鳴るとか蹴とばすという外に出る行動が違ってくるぐらいであり、本質的に短気であるのは一向に変わりがない。修行とか努力などで手に入れるものには、得てしてたいしたものはないものだ。

私には、放浪への強い願望がある。家も要らぬ、土地も要らぬ、さすらい人でありたいと昔から願ってきた。無人島に住むもよし、原野に住むも佳、私はＮＡＳＡが他の星への実験的移住者を募集したら、いの一番に名乗りをあげる。

私は東北海道のはずれに、かりそめの住居を構えることに熱中しつつも、絶えず、見知らぬ国へのはるかなる旅を夢見続けていた。

女房はしかし、私を手放したくないようだった。

「胃がそんなに悪いのに、遠くへ行ってどうしますか」

胃に硬いしこりがあって、週に一度、大吐血をしていた時期があったのだ。私は医者に命じて、わが胃を切除させた。

胃が健全になったら、女房がすかさず言った。

「痔の方はどうなんですか。知らぬ土地で気圧でも違ったら、ぞろぞろ、ぞろぞろ出てきますよ」

まるで中身のすべてが肛門からあふれ出るような脅しぶりだった。

それでもパスポートを取得し、世界地図を購入して、閑を見てはのぞきこんだ。

たくさんの国がある。数限りない島がある。眺めているうちに目移りがして、あれにすべきか、

これにすべきか、消え入るがごとくに悩んだ。
友人や知人にも、珍しい情報が入ったら教えてくれるようにと頼んでおいた。
ある人はこう言ってそそのかした。
「アフリカのコンゴに巨大蛙が棲んでるそうですよ。目撃した人の話によると、子供だったら上に乗って散歩出来るほどだと言いますからねえ」
「ははあ、コンゴですか」
「大人が脚をつかまえてぶら下げると、口が地面についているのです。これがまたおいしくて」
「そうでしょうとも」
口の中がよだれで一杯になった。
「コンゴ人は巨大蛙を見つけると、目が血走り、鼻息が荒くなり、おれのだ、いやわしが最初に発見した、いやいや僕がまずとびついて押えたのだと、肉の分配をめぐって血の雨が降るそうです」
「ぜひ行きたい。最初の旅はコンゴにしよう」
私は巨きな蛙の巨きなオタマジャクシを見たかった。きっとそれは、ビワコオオナマズより大きいに違いないと思った。
もし啼くとしたら、声も勇壮であろう。ひょっとしたら、猛獣の咆哮より大きいのではないだろうか。

書斎に寝転んで空想していると、コンゴの蛙こそが夢見続けてきた私好みの動物に思えてきた。それだけ大きければ、パクリと噛みつきもするだろう。蛙に噛まれて大怪我をするなんて、実に愉快ではないか。

私は宣言した。

「ようし。おれはコンゴへ行くぞ」

するとそこへ、十年間会っていない友人が訪ねてきて、

「おい、これは秘密なんだがね。南米のある地方に、胴のさしわたしが二十センチ、長さが二メートルというミミズがいるそうなんだ。いや本当の話、おれは信頼すべき筋から、そのミミズが棲息する場所の地図を手にいれたんだよ」

「それはミミズというより大蛇だなあ」

「現地の人はこれを輪切りにし、ステーキにするそうだよ。それから釣りの餌。これを使えば、大物がじゃんじゃん釣れる」

「色は？」

「黒っぽい赤だと聞いている。今なあ、ミミズの養殖をやっているさる企業家は、年間、数億の売上げがあり、ニコニコしているというじゃないか。おい、糸っ切れみたいなミミズで数億円なんだぜ。さしわたし二十センチの、長さ二メートルの――こうくれば、一千億円の売上げだって夢じゃない」

「話半分でも五百億円か」
蛙より南米のミミズの方が魅力的に思えてきた。ミミズはしかし、噛みつかないだろうから、その点が不満だけど。
私は膝を叩いた。
「こいつはいいぞ。その大ミミズは、コンゴの巨大蛙の餌にもってこいではないだろうか。これはいい、これはいい」
二メートルのミミズをがっきとくわえた巨大蛙が、放してなるものかと天をにらむ。ミミズはミミズで、なんのやせ蛙などに負けてなるものかと、ここを先途と暴れまくる。まさしく世紀の大格闘である。
私は叫んだ。
「おれは南米へ行くぞ」
しかしよく考えてみると、ミミズは蛙の餌なのだから、蛙の方を先に採集に行く方が本筋だと思えてきた。でもまた、餌を用意しておいて蛙さんにきて貰ってもいいようでもあった。
どちらがいいのだろう。
考えれば考えるほど分からなくなって、私は疲れはててしまった。それでついに、コンゴは今後の問題として残してしまった。
どこへ行くべきか。

私は四年間ほど、心ここにあらず、書斎のトイレのドアを開けたままにしておいて、出たり入ったりして悩んだ。トイレこそは、私がものを考える場所なのである。

出たり入ったりするのは他でもない。あまり長いこと入っていると、娘や妻がドアの前に立ち、

「ねえ、大丈夫？」

と、真剣に訊くからである。

目を閉じ、極度の精神集中を自分に強いた。

これは私が発明した、科学的な決断法である。たとえば競馬だったら、出馬表や予想新聞を穴の開くほど見つめ、次には目をつむって心気を澄ます。すると天啓のごとく、馬の名が脳裏に浮かび出てくる。それこそが、ゴールを一着で駈け抜ける馬なのである。

さあ――。

何か浮かべよ。

椰子の林。西の空に真紅の夕日。

いつの頃からか、しつこく同じ絵が浮かぶようになった。

それがどこであるのか、私は知っていた。

セイロン。

現在の名をスリランカ。

かつて私は十日間だけ、娘を連れてアフリカへ行った。飛行機は、ホンコン、コロンボ、セイ

シェル、ダルエスサラームと立寄り、ナイロビまで飛んだ。

羽田を朝発って、コロンボは日暮れ時だった。バンダラナイケ国際空港に到着しましたと機内放送があったけれど、コロンボ——すなわちスリランカの首都にある空港は、短い滑走路が一本あるだけで、まわりは椰子に取囲まれていた。

日は西に傾いて、赤く焼けていた。タラップから地面に足を降ろすと、熱気がどっと這いのぼってきて、ズボンの中が暑くなった。

通過客として憩う建物は、日本のローカル空港のものより小さかった。

私はロビーで芳醇なセイロン紅茶を飲んだ後、屋上に出てみた。

太陽は、紅茶を一杯飲む間に沈んでいて、暗闇が急速に辺りを支配しつつあった。椰子の林はすでに黒いうねりとなって、どこまでも続いていた。

私は耳を澄ました。飛行機の傍で、時折り話し声が聞こえるだけだ。それも、まわりの圧倒的な静寂の中に吸いこまれてしまう。

——この奥に何があるのだろう。

私は四十度に近い暑さの中で身ぶるいをした。ただただ暗いこの奥には、未知のものがぎっしり詰まっているように思えた。

アフリカからの帰路、飛行機はまたコロンボに立寄った。

奇しくも、その時も日暮れで、赤い夕日が地平線にとけていくところだった。私はまたロビー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com